りょうかわ

学校だより　令和2年10月8日発行　第12号　新潟市立両川小学校

通知表（評価の観点）が変わります

校長　　中村　雅芳

今年度より，全国の小学校で「新学習指導要領」に沿った学習が展開されています。当校でもコロナ禍で多少の遅れはありましたが，現在では遅れを取り戻し，どの学年も年間指導計画（ホームページ上で公開）に則って日々の授業を進めています。

「新学習指導要領」では，子どもたちに育てるべき資質・能力を３つの柱として示しています。

○ 知識・技能　○ 思考力・判断力・表現力等　○ 学びに向かう力・人間性等

これを基に，子どもたちの学習状況を記録しておく「指導要録」の評価の観点が，以下のように改定されました。

○ 知識・技能　○ 思考・判断・表現　○ 主体的に学習に取り組む態度

「知識・技能」は，各教科で身に付けるべきとされている知識や技能について十分習得しているかを評価します。「思考・判断・表現」では，課題や問題に向き合って解決していく能力や，仲間と協力しながら問題解決の糸口を見つけていく力，自らの考えを表現する力等を評価します。「主体的に学習に取り組む態度」は，主体的に意欲的に取り組んでいる態度，学習を進めるために試行錯誤している態度，自分の学びを客観的に振り返っている態度を評価します。ところで，新学習指導要領で「学びに向かう力・人間性等」が，指導要録では「主体的に学習に取り組む態度」に変わっているのはなぜか。それは，客観的に評価しきれない「個人内評価」が，「学びに向かう力・人間性等」には含まれていると判断されたためです。

当校でも，この「指導要録」の改定に合わせて通知表の「学習の様子（評価の観点）」を変更しました。昨年までとは，評価の観点の数や順番が違っていることをご承知おきください。各教科いずれも上段から「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を表しています。

ところで，なぜこのような変化が起こったのでしょうか？きっかけは，平成１５年に行われたＯＥＣＤ（経済協力開発機構）の学習到達度調査（ＰＩＳＡ）で，日本の成績が著しく低下したことだったと言われています。

当時は「ゆとり教育が元凶だ！」との批判が即座にあがりました。しかしそれは的外れで，本当の原因は，ＰＩＳＡの問題で問われた「読解力」「論理的思考力」「表現力」に弱さがあったことでした。例えば「あなたの考えを書きなさい」や「そう考える理由は何ですか？」と問われた自由記述問題への無答率が，世界の平均と比べて８ポイント以上も高かった。つまり，筋道立てて考えたり，自分の考えを分かり易く表したりすることが苦手な子どもたちが多かったのです。これまでの知識・技能だけを重視した教育（いわゆる詰め込み主義）では，日本はいずれ立ちゆかなくなる！‥おそらくそんな危機感から，平成１９年には学校教育法が改訂され，それまでさまざまな定義付けがされてきた「学力」が，正式に定義付けられました（第３０条 第２項)。それが，前述の「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」です。法律改訂と同時に，実社会での知識や活用力に焦点をあてた「全国学力・学習状況調査」もこの年から始まっています。

来年からは中学校が，再来年からは高等学校が，新学習指導要領の全面実施となります。評価項目も小学校と同様に，すべて３項目に統一されます。これは，過去には見られない大きな変化です。特に特徴的なのは高等学校で，自分の在り方や生き方を考えながら，課題を見つけて解決する力を身に付ける「総合的な探究の時間」が新設されます。

大学入試も令和３年１月から「大学入学共通テスト」が始まり，これまでのセンター入試とは大きく変わるといわれています。英語の外部試験導入や数学の記述式導入はさまざまな問題があり先送りされましたが，それでも次の変化は確実視されています。

・全科目で思考力が問われる（“解なし”選択肢も）
・国語は，身近な実用文が出題され，複数の文章を比較して解かざるを得なくなる
・数学は，文章から問題の意図を読み取り，それを数学に変換して解かざるを得なくなる
・英語は，多くの変更（問題文が英語・リスニング１回のみ・配点変化など）がある

昔の教育で育ってきた私です。昔の教育で授業をしてきた私です。だから，昔の教育を否定するつもりはありません。ただ，グローバル化・ボーダレス化が確実に進む未来を「しなやかに，たくましく生き抜いていく力」を子どもに付けていきたい。そのためには，自分自身が昔にとらわれず，変わっていかなければならない。教師はみんな，そんな思いをもって，日々の教育活動に取り組んでいます。

通知表は，教師と子どもが共に創り上げてきた学習活動（教育活動）の証です。一定期間の子どもの学習状況をふり返り，まとめてわかりやすく子ども自身や保護者に示し，さらに次の学習への意欲を高め，めあてを明確にしてもらうためのものです。どうか，結果に一喜一憂するのではなく，ぜひ，子どもと共に成長を喜んだり，次にがんばることを決めたりするための前向きな材料として活用していただきたいです。